

## 中国少数民族双語教学研究會 「第三回双語教育国際学術検討會」に参加して

犬 塚 優 司

中国には「春城（春の都市、春の街）」と呼ばれる街がある。雲南省昆明市のことである。沖縄の石垣島とほぼ同じ北緯 25 度に位置しながら、標高 1,891 メートルにあり、夏涼しく、冬暖かい、四時に春を感じる街であることに由来する。この気候を利用して、花卉の栽培も盛んで、1999 年には世界園芸博覧會が開催された。

その昆明において、昨年 7 月 18 日～20 日、中国少数民族双語教学研究會主催、雲南民族大學共催で、第三回双語教育国際学術検討會が開催された。筆者は、研究會理事長である丁文樓教授（中央民族大學）、中央民族大學胡振華教授のお誘いを受け、本検討會に参加した。

中国少数民族双語教学研究會は、1979 年に「全国民族院校漢語教学研究會」として発足し、1985 年より現在の名称を用いている。中国の少数民族の人々に対する中国語教育の研究者及びそれを実践する教師によって構成され、中国少数民族に対する中国語教育に関する研究とその実践報告を中心に、中国の民族言語政策やバイリンガル教育理論などが議論されている。また、機関誌として『中国少数民族双語教学研究會通訊』を発行している。2001 年、2003 年に続き、今回が三回目となる国際学術検討會である。

7 月 17 日、上海から昆明空港に到着し、タクシーで會場のホテル楚雄大廈に向かった。ホテルのホールで、登録を行い、250 米ドル相当額を人民元で支払い、「會議指南」「出席証」を受け取った。この出席証により、ホテルの宿泊の手配やレストランでの食事の提供が受けられることができた。フロントでは、出席証を見せ、彝族の民族衣装を着た若い女性にチェックインの手続きしてもらった。ホテルの名前である「楚雄」は、昆明から西に約百キロ離れたところにある、彝族の多く居住する都市の名である。彝族の人々が建てたホテルなのであろう。

検討會参加者は原則としてこのホテルに宿泊し、食事もホテルのレストランでとった。會期中、レストランやホテルの部屋で、参加者が盛んに交流を深めているのを見かけた。

翌 18 日午前、ホテル 10 階の會議場で開會式が行われた。雲南省の指導者のあいさつに続き、雲南省教育庁副庁長羅嘉福氏による雲南省の民族教育政策に関する講話、中国人民

代表大会常務委員会副委員長鉄木爾・達瓦買提氏による講話、本研究会顧問伍精華氏の講話、研究会理事長の丁文楼教授の講話があった。鉄木爾・達瓦買提氏の講話の後、会場から、少数民族が漢語（中国語）を学んでいるのに漢族が民族言語を学ぼうとしないこと、ウイグル族である鉄木爾氏が漢語（中国語）で話をしていることなどについて、意見が出された。それを受けて、「族際語」としての漢語（中国語）の役割を強調した意見が述べられていたところを興味深く聞いた。

その後、祝賀の手紙、電報の披露があった。事前に中央民族大学胡振華教授から、西日本言語学会からの祝辞をお願いしたいとの要請を受けた。古浦敏生会長、今田良信運営委員長と相談したところ、次のような祝辞をいただいた。それを筆者が中国語に翻訳し、原文とともに研究会事務局に提出しておいた。その祝辞も併せて披露された。

第三回双語教育国際学術研究会開幕に際し、西日本言語学会を代表し、謹んでお祝いを申し上げます。このような国際的な学術会議が昆明で開催され、私たちの学会の役員である犬塚優司氏が本大会に参加することは、西日本言語学会会長として、大きな喜びであります。本大会を通して、日本、中国と全国各地の言語研究者、言語教育研究者が交流を深めることを期待しています。本大会のご成功をお祈り申し上げます。

西日本言語学会会長 古浦敏生

午後からは、全体の学術報告が10階の会議室で行われた。

最初に、雲南省、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区などの代表が各地の少数民族への双語教育の現状や問題点、学校における具体的な教育状況などを発表した。

その後、海外からの研究者による発表があった。キルギスタンのキルギス人文大学学長ムサヤフ（穆薩耶夫）教授、モンゴルのモンゴル科学アカデミー会員 D. Tumurtongoo 教授、筆者、日本の福岡大学甲斐勝二教授、世界少数民族言語研究院東アジア部 B. Allen 研究員の5名が発表を行った。甲斐教授と筆者は中国語で発表し、他の発表者は自国語での発表に中国語への通訳が付いた。筆者は、「关于岛根县立国际短期大学实施的中国语言研修考察」という題で、島根県立国際短期大学で実施されていた中国語学研修に関する発表を行った。甲斐教授と Allen 研究員の発表は、それぞれペー（白）語のアルファベットの作成とその普及、ペー語による教育に関するものであった。

発表に際し、筆者は当初、発表20分、質疑応答10分であるが、発表は25分くらいになっても構わないと聞いていた。そこで、約25分の原稿を用意し、昨年4月末に発表原稿を事務局に送付し、それを読み上げることにしていた。ところが、日本からの出発直前に、発表時間は質疑応答の時間を含めて20分になったとの連絡を受け、急遽原稿のうち読み上げるべき箇所を選び、昆明に到着した。昆明に着いた17日、夕食後今度は、15分で発表してほしい旨、伝えられ、慌ててしまった。結局、発表者のキャンセルがあり、ま

た司会者である胡振華教授の配慮により約 20 分間発表原稿を読み上げることとなった。発表後、胡振華教授が丁寧に発表を総括して下さったことに感謝する。

当初、事務局から参加予定者は 100 名前後で、発表資料は 50 ～ 100 部用意してほしいとの連絡を受けていた。そこで、発表原稿を約 70 部作成し、17 日の受付の際、事務局へ提出した。ところが、実際の参加者は約 230 名となり、発表資料は、来賓や海外からの参加者には用意されていたが、研究会参加者全員に行き渡っていなかった。

発表の後、丁理事長から、参加者の総数は当日まで十分に把握できず、本来参加者全員が楚雄大廈に宿泊できるはずであったが、一部の参加者を近くの別のホテルに宿泊してもらうことになった、また、雲南民族大学の担当者との連絡不足により、参加者に不便をかけることもあった、などという話を聞いた。多くの研究者が広大な中国各地から参加する会議の運営には多くの困難があることと思う。

19 日の午前中は、中国の研究者による発表が行われた。多くの研究者が原稿を読み上げる形で発表していた。ただし、事前に資料が配付されず、「会議指南」には発表者の名前のみが掲載されているため、題目さえはっきりわからなかった発表もあった。しかし、漢語（中国語）教育に関する実践的な報告の中には、興味深いものもあった。

午後からは、参観活動が行われた。昼食後、雲南省特産の茶葉の店を訪れ、ウーロン茶やプーアル茶のお手前や試飲を楽しんだ。その後、雲南民族村を参観した。雲南民族村は、雲南省に居住する少数民族の建築物を建て、少数民族の人々による芸能や生活習俗を見学できるようにした施設である。学術的というよりも観光の場であった。実は、雲南民族村の隣に雲南民族博物館があり、雲南省の少数民族の文物を展示している。筆者は研究会終了後、そちらを訪ねたが、文字資料など、学術的には興味深いものが多く展示されていた。また、博物館内の書店には、少数民族に関する文献が販売されており、購入した本を日本に郵送してくれるサービスもあり、便利である。

20 日の午前中は、グループ討論会が行われた。参加者はその関係する地域により四つのグループに分かれ、討論が進められた。私は、新疆の研究者のグループに参加した。司会者の指名にしたがって、参加者が意見を発表し合うもので、自分の発表について資料を用意していた参加者もいたが、ほとんど口頭での討論であった。日本の学会ではあまり見られない形式であった。そこでは、かつては多くの子供たちが民族学校に通い、民族語で教育を受け、その中で漢語（中国語）教育がなされていたが、最近では親が子どもを漢語（中国語）で教育する学校へ入学させることが多くなったこと、中華人民共和国国家通用語言文字法に基づき、公務員は 2002 年より実施されている「普通話（中国語の標準語）」の試験を受験し一定のレベルに合格するよう要求されていること、新疆では、大学進学の前備教育において、漢語（中国語）能力を測定する試験として、本来外国人留学生用である「漢語水平考試（HSK）」が利用されていること、などの問題が議論されていた。中国の言語

教育の現状に関わる興味深い議論であった。

午後は、海外からの研究者が十数名集まり、議論と交流の場が設けられた。世界少数民族言語学院東アジア部の人たちが、ペー（白）語教育のための教科書の作成や文字教育の問題点を議論していた。福岡大学の甲斐教授が「その言語を学んで食べていける、そんな環境がないと、民族語による教育は先細りとなるだろう」と述べていたことが印象に残る。

その後、10階の会議室で閉会式が行われた。閉会式では、中国少数民族双語教学研究会の役員人事や団体会員への会員証の交付、研究会朱崇先秘書長による総括報告、北京語言大学出版社威德祥社長による出版事業紹介、研究会理事長丁文楼教授の講話が行われ、三日間にわたる会議が終了した。

夜は、会議の無事終了を祝しての宴が、ホテル近くのチベット族のレストランで催され、多くの参加者との交流を深めることができた。

翌21日、多くの参加者は、昆明近郊にある観光地石林（李子箐石林）を参観した。昆明の市街地から約2時間東に向かったところにある石林は、高さ50メートルの石の柱が林のように並ぶ天下の奇観である。中には少女の姿や駱駝に乗った人の姿に見立てられた石もあり、一見の価値ある景勝地である。また、道すがら二本の鉄道線路を見かけた。そのうちの一つは、かつてフランスが雲南とベトナムを結ぶために敷設したものであり、中国の近代史を語る上で重要な遺産と言えよう。

22、23日、筆者は雲南民族博物館や昆明の街を巡り、上海経由で25日に帰国した。

今回、本研討会に参加して、中国における少数民族への漢語（中国語）教育に関する理解を深めること、現場で実際に指導する教師の話聞くことができた。また、多くの人々と知り合い、交流を深めることができた。筆者にとって、大変有意義な経験であったと思っている。

昨年8月下旬、筆者は、北京を訪れ、修正を加えた発表原稿を丁文楼理事長に手渡した。今回の会議に提出された論文をまとめて、論文集を出版するとのことであったが、本稿を作成している2005年1月の時点では、まだ出版されていない。

また、丁理事長から、西日本言語学会との交流を進めていきたい旨、筆者に伝えられた。中国少数民族言語、中国語教育、言語政策などに興味のある方は、筆者あるいは中国少数民族双語教学研究会へ連絡してほしい。中国少数民族双語教学研究会の連絡先は、次の通りである。

中華人民共和国 100081 北京市海淀区中関村南大街27号  
中央民族大学 中国少数民族双語教学研究会  
Phone & Fax : 86-10-68931105